# 特別史跡『大宰府跡』・ 蔵司 地区の調査成果 ~大宰府史跡第246・250次調査~

九州歷史資料館 埋蔵文化財調査室 調査研究班

当館では、大宰府政庁跡西側の蔵司の地名が残る丘陵を、平成21年度から継続的に調査しています。現在は、蔵司丘陵の中央部南側において、官衙跡の構造解明に向けた重点調査を実施しています。

### 1. 蔵司とは

古代(奈良・平安時代)に、九州全体の行政や軍事・外交を担当した地方最大の役所「大宰府」には、多くの下部組織がありました。その一つが「蔵司」で、九州各地から税として納められた特産品や布を管理していました。

現在、発掘調査を実施した場所の小字名が「蔵司」であることから、「 は 司」が置かれたと考えられます。

江戸時代の記録によると、蔵司丘陵 上には133個の礎石が点在し、古い瓦が 多く散乱していたようです。

大正3 (1914) 年、中山平次郎博士は、蔵司丘陵上の多くの礎石が埋没していることや高熱を受けた鉄製品が多く見つかったことなどを報告し、倉庫や工房が存在したと考えました。その後、昭和8 (1933) 年、蔵司丘陵上の工事に伴って畑地を地下げした際、大型礎石建物跡が発見されました。

その後、長い間調査が行われていませんでしたが、平成21年度以降、九州歴史資料館が蔵司丘陵の本格的な調査を開始し、今日に至ります。

なお、蔵司地区は大正10 (1921) 年に 政庁跡とともに国の史跡「大宰府跡」 に指定され、昭和28 (1953) 年には特別 史跡に昇格しました。

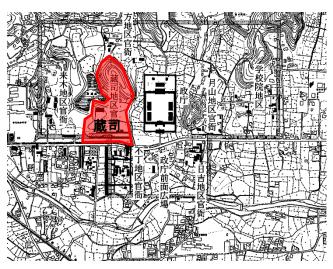


図1 蔵司地区の位置

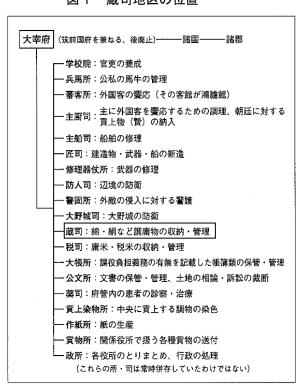


図2 大宰府の実務を担った行政機関「司・所」

# 2. 第246・250次調査の成果

## 調査成果のポイント

- ①令和2年度に確認された総柱礎石建物の基壇から、内部に埋め置かれた鉄製小札 (てつせいこざね・甲冑の部材)1枚を発見しました。
- ②「鎮壇具(ちんだんぐ)」に利用された鉄製小札の確実な事例としては、九州では初めての発見です。鉄製小札を「鎮物(しずめもの・神への捧げもの)」に利用した事例は、奈良-平安時代では都(平城宮・長岡宮)を中心に確認されています。
- ③蔵司丘陵中央部で、南北軸に沿った溝や築地を確認しました。この南北軸は大宰府条坊(都市区画)の推定右郭二坊路と重なっており、蔵司丘陵が大宰府の都市設計に組み込まれていることが明らかになりました。また、築地は平安時代(9世紀後半)に築かれていることから、官衙域の都市区画が長期間維持されていることが分かりました。

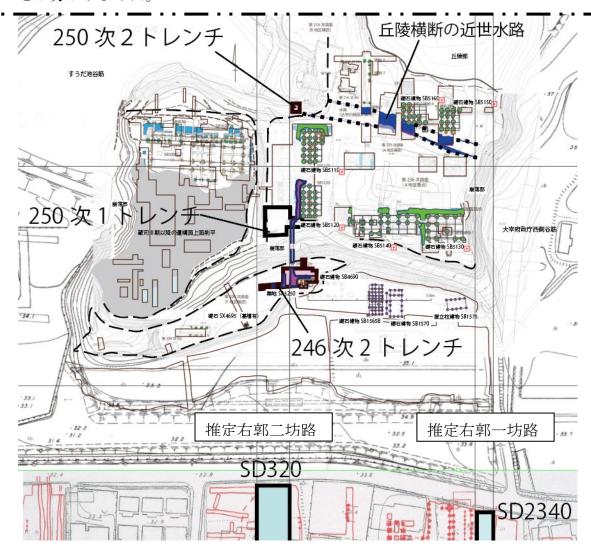


図3 大宰府史跡第246・250次調査地点と大宰府条坊(都市区画)

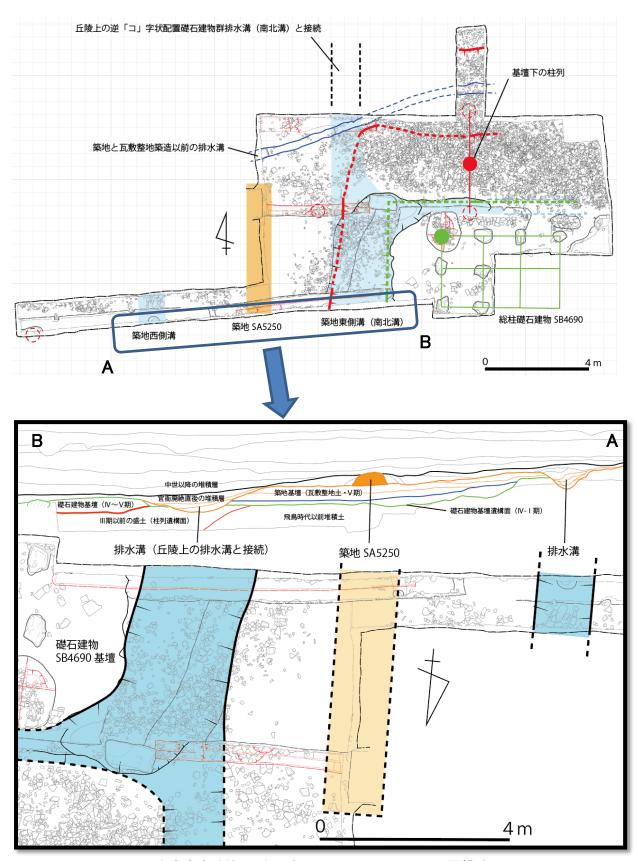


図4 大宰府史跡第246次調査2トレンチの平面図と土層模式図

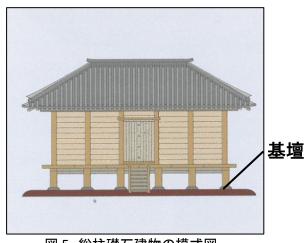


図 5 総柱礎石建物の模式図

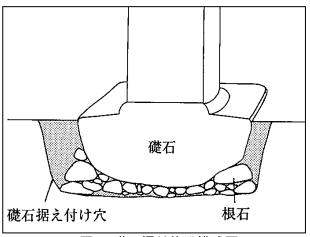


図 6 礎石据付状況模式図

0

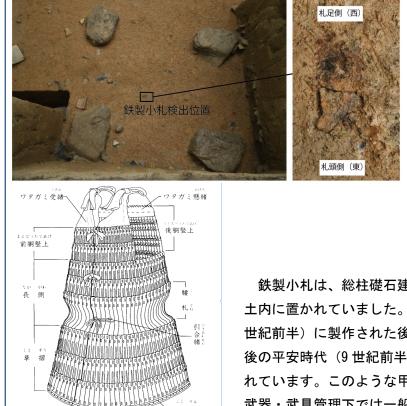
0

0

0

0

復元図



鉄製小札は、総柱礎石建物の基壇を築造する途中の盛 土内に置かれていました。この鉄製小札は、奈良時代(8 世紀前半)に製作された後、兵庫に納められ、約100年 後の平安時代(9世紀前半)に「鎮壇具」として埋納さ れています。このような甲冑の長期運用は、律令国家の 武器・武具管理下では一般的に行われており、蔵司地区 で発見された大量の被熱鉄製品でも確認できます。

図 7 総柱礎石建物の基壇盛土内から出土した鉄製小札(小札甲の部材)

#### 中 屈 一 警

小札甲(こざねよろい)模式図

図1:太宰府市2005『太宰府市史』通史編I 一部改変

図2:杉原敏之2011『シリーズ「遺跡を学ぶ」076 遠の朝庭・大宰府』(新泉社) 一部改変

図3・4・7の一部 (小札甲の模式図以外): 九州歴史資料館作成

図5:九州歴史資料館2015『大宰府史跡ガイドブック2 特別史跡大野城跡』

図6:奈良文化財研究所2004『古代の官衙遺跡』 I 遺構編

図7小札甲模式図:公益財団法人元興寺文化財研究所2015『国宝東大寺金銅鎮壇具保存修理調査報告書』東大寺、公益財団法人元興寺文化財研究所2017『鎮物としての武器・武具』

※調査中に修正の可能性もあるため、図3・4・7は転載しないでください。